聖徳大学所蔵G. マーラーの自筆書簡（1889年）と当時の彼の音楽活動
―ブダペスト着任時の仕事をめぐって―

山本　まり子

1　はじめに―聖徳大学所蔵 G. マーラーの自筆書簡

2023 年から 2024 年にかけて、聖徳大学川並弘昭記念図書館において「特別展覧会 聖徳学園創立 90 周年記念　モーツァルトの自筆譜（複製）と著名作曲家たちの自筆書簡」展が開催されるにあたり、大学図書館に所蔵される著名作曲家の書簡の一覧を目にする機会があった[1]。その中の 1 点にグスタフ・マーラー（Gustav Mahler 1860-1911）の自筆書簡があることを初めて知り、大学から許可を得て書簡を開示してもらった。本論考は書簡の内容を確認すると同時に、関連するマーラーの活動と当時の音楽状況の解明を目指す調査研究である。この書簡は国際グスタフ・マーラー協会が発行した 2022 年の年報において、Willnauer の論考『グスタフ・マーラーによる新しく明らかになった知られざる書簡と自筆譜』（Willnauer 2022）で文面の一部が紹介されている。文面の出典はドイツ・Stargardt 社の 1990 年 3 月 27 日・28 日のオークションカタログ（647, 27/28 März 1990, Los 886）とだけ記載されているため（Willnauer 2022: 41）、書簡全文を公開するのは本稿が初めてだと思われる。

図書館の記録によれば、この書簡（以下、便宜的に「書簡 S」と略）は東京聖徳学園が丸善から購入し、平成 6（1994）年 5 月 18 日に受け入れたものである。これまで学園内に保管され、展覧会等で公開されたことはない。【図版 1 】に示すように、書簡は 1 枚構成で、サイズは 290×230mm、「ブダペスト、1889 年 1 月 16 日」というドイツ語による日時・場所の記載とマーラー自身の署名がある。インクの染み、2 か所の下線部が認められる。学園の購入時、書簡 S はすでにマーラーの肖像とともに額に収められていた。そのため現物を額から取り出して直に調査するのは不可能な状態にある[2]。

書簡 S の原文と筆者による日本語訳は以下の通りである[3]。

---

[1] 一覧は、展示される書簡が決定する以前の情報であった。展覧会リーフレットのアーカイブ資料：http://www.seitoku.jp/lib/newhp/seitokumuseum/mozart202309.pdf

[2] 添えられた肖像は 1898 年、ヴィーン宮廷歌劇場の音楽監督着任時のものである（Kaplan 2011: 画像番号 28）。

[3] 学園の購入時、額に収められた書簡と肖像本体に、書き起こされタイプ打ちされたドイツ語原文とその訳文が添えられていたが、本稿では原文の誤記を訂正し、日本語訳を修正した。下線はマーラーの手によるものである。

【図版１】G. マーラー自筆書簡（聖徳大学所蔵）

【書簡 S：原文】

Budapest, am 16. Jänner 1889
Herrn Wild
Wien

Geehrter Herr,
In Anknüpfung an unsere gestrige mündliche Auseinandersetzung bitte ich sie, den von uns eingesandten Originalvertrag, von Frau Kupfer unterschrieben, baldigst retourniren zu wollen; auch erkläre ich, daß keinerlei Modifikationen desselben zu gewähren im Stande wäre und daß alle Unterhandlung diesfalls fruchtlos wären.
Ich muß sehr bitten. mir längstens bis 25. dieses Monates eine definitive Zusage zukommen zu lassen, weil ich meine eventuellen andersartigen Dispositionen nicht länger hinausschieben könnte.
Als Debut ist leider Mephistofele unmöglich, weil wir derzeit keinen Faust haben.
Ich bitte sehr, um freundlichen Vorschlag einer anderen Partie.
Um umgehnede Äußeung bittet ergebenst

Mahler

【書簡 S：日本語訳】

1889 年 1 月 16 日、ブダペスト
ヴィルト様
ヴィーン

拝啓
昨日の話し合いの件ですが、私たちからお送りした契約書原本に、クプファーさんにサインしていただいた上で至急返送してください。この契約書にはいかなる変更も認めることはできません。また、もうどんなに協議しようとも無駄なことです。
遅くとも今月 25 日までに確定的な了解のご返信をいただけるよう是非ともお願いいたします。と申しますのも、万一変更を余儀なくされた場合を考え、それ以上は延ばせないからです。
《メフィストフェレ》をデビュー作にというお話は残念ながら不可能です。なぜなら、現在ファウスト役を歌える歌手がおりませんので。
他の役柄をご提案くださいますよう、お願いいたします。
早急にお返事いただけますようお待ち申し上げます。

マーラー

（下線はマーラーによる）

書簡 S の書かれた 1889 年 1 月は、指揮者としてのマーラーの評価が高まっていたブダペスト時代に当たる。マーラーは 1888 年 10 月、オーストリア＝ハンガリー帝国の一方の首都ブダペストのハンガリー王立歌劇場（Ungarische Königliche Oper）に音楽監督（Musikdirektor）として着任した。1891 年 3 月 22 日に職を辞してブダペストを離れるまで、在任期間は 2 シーズン半という短い時間であったが、マーラーが歌劇場でトップの地位を得たのはここが最初であった。後述するように公私ともに激動の時期ではあったが、その後ハンブルク、ヴィーンと続いてヨーロッパの楽壇の最高位に昇り詰めていく飛躍のタイミングにあった。1889 年 1 月 16 日付の書簡 S は着任から 3 か月を経た時のもので、最初のシーズンのオペラの運営業務に関して書かれており、職務を適切に執行しようとしているマーラーの姿勢が見て取れる。

２　一次資料としてのマーラーの書簡

マーラー自身は日記、回想録を残していない。手紙は彼の音楽観が表明された唯一の一次資料と言える。日記に代わる存在とも言えるほど頻繁に、私的な用件や業務連絡を様々な相手に書き送っていた。マーラーの書簡の多くを編纂、出版したブラウコップフは『マーラー　隠されていた手紙』（Blaukopf 1983, ブラウコプフ 1988）の序文で、マーラーの書簡を編集するときに直面する問題を指摘している。それはマーラーが手紙に日付を書くことが少ないこと[4]、送付相手の元に残った手紙がほとんどで、相手がどのように反応しマーラーに返信したかは残っていないという（ブラウコプフ 1988: 3-4）。後者のアンバランスの問題は、他の資料という傍証によって内容を確定する必要が出てくる場合が多いことを意味する。

マーラーの書いた書簡の多くは、次のように既に出版されている。しかし、書簡 S はこれらのいずれにも掲載されていない。

a) 友人・知人・同僚等への様々な書簡を収録した書簡集。初版は 1924 年、その後増補・改訂が重ねられた（Braukopf 1996）
b) 妻アルマ（Alma Mahler Werfel による回想とマーラーの手紙が二部構成で収録された出版物。初版は 1940 年、その後増補・改訂が重ねられた（Mahler 1991）
c) マーラーとリヒャルト・シュトラウス（Richard Strauss 1864-1949）との間で交わされた往復書簡集（Blaukopf 1980）
d) 国際グスタフ・マーラーを中心に収集された新たな書簡、そして研究者たちによって追加提供された書簡を収録した書簡集（Braukopf 1983）
e) マーラーが作曲家、指揮者、劇場のインテンダントといった音楽関係者に送った書簡集

[4] 確かにマーラーの書簡すべてに発信地と日付が記されているわけではない。その場合、日時と場所は書簡の内容を根拠に推定されることになる。

（Willnauer 2010）
f) 同じく出版社に送った書簡集（Willnauer 2012）
g) 地域をオランダに特定してまとめられた書簡集（Reeser 1980）
h) マーラーのハンブルク時代（1891-1897）にオペラ歌手として活躍し、マーラーと恋愛関係にあったアンナ・フォン・ミルデンブルク（Anna von Mildenburg 1872-1947）に宛てた書簡集（Willnauer 2006）
i) 従来内容の要旨のみが知られていた手紙の全文、あるいはまったく存在が知られていなかった新発見の手紙、合計 11 通の全文が収録された、国際グスタフ・マーラー協会の年報 *Nachrichten Mahler-Forschung* の研究報告（Willnauer 2022）

3　書簡 S と密接に関連する他の書簡

書簡 S の内容を検討するにあたり、本稿では 3 つのヴィルト宛書簡を取り上げる。時系列に従って便宜的に書簡 A、書簡 B、書簡 C と略す。ただし、書簡 S との関連性に鑑み、C、A、B の順に考察を進める。
・書簡 A：1888 年 10 月初め
・書簡 B：1889 年 1 月 1 日
・書簡 C：1889 年 1 月 13 日

3.1　書簡 C（1889 年 1 月 13 日付）

3.3.1　書簡 C の内容

以下の書簡 C は、書簡 S の書かれた 3 日前、1889 年 1 月 13 日付である。Willnauer（2022）の研究報告で初めて全文が公開された。書簡 C と S は宛名と言及された人物が一致しており、その連続性は明らかである。書簡 C の文面は次のような内容である（筆者日本語訳）。

【書簡 C：日本語訳[5]】
ブダペスト、1889 年 1 月 13 日

拝啓
　クプファー＝ベルガーさんの契約書を同封いたしますので、署名の上ご返送ください。
　ここでご注意いただきたいのは、いかなる条件下でも、単なる客演を、あな

[5] 原文は以下の通り。“Budapest, am 13. Jänner 1889 / Geehrter Herr! / Beiliegend der Vertrag für Frau Kupfer-Berger, welchen ich, mir unterschrieben zu retourniren bitte. – / Ich muß hiezu bemerken, daß wir auf ein bloßes gastspiel, „mit der Berechtigung, hierauf mit Frau K. In Engagement-unterhandlungen zu treten “, wie Sie sich ausgedrückt haben, unter keiner Bedingung reflektiren würden. / Um ungehende Äußerung bittet［編者注：単語解読不能］/ Ihr ganz ergebenster / Gustav Mahler”（Willnauer 2022: 41）

たが言うような「K さんと雇用契約交渉に入る権利がある」という表現に変えるわけにはいかないということです。
早急にコメントをお願いします。

あなたの　グスタフ・マーラー
（下線はマーラーによる）

3.1.2　書簡 C と書簡 S から読み取れる状況

２通の書簡の送付相手イグナツ・ヴィルト（Ignaz Wild (旧姓 Stiaßny) 1849-1909）は劇場監督、劇場のエージェント（仲介業者）である。元々は俳優であったが、ヴィーンで 1877 年から劇場とコンサートのエージェントに転向した。1885～1903 年はバート・イシュルの文化劇場（レハール劇場 Kurturtheater=Lehártheater）で監督を、また 1894 ～ 1899 年にはヴィーンのヨーゼフシュタット劇場（Theater in der Josefstadt）の監督を務めた、（Willnauer 2010: 411-412）。

話題の主、クップファー＝ベルガー（書簡 S では「クップファー」）はソプラノ歌手で後に指導者となったミラ・クップファー＝ベルガー（Mila Kupfer-Berger 1852-1905）である [6]。ヴィーンに生まれ、ヴィーン音楽院（Wiener Konservatorium）[7] で学んだ。1871 年リンツ市立劇場で、グノー（Charles François Gounod 1818-1893）のオペラ《ファウスト *Faust*》（1859 初演）でデビューすると、すぐにベルリン宮廷歌劇場（Berliner Hofoper）と契約して 1875 年までの 4 年間はそこで活動した。1875 年にヴィーン宮廷歌劇場（Wiener Hofoper）に客演すると大成功を収めて直ちに契約を結び、1885 年までの 10 年間人気歌手として活動した。

クップファー＝ベルガーのヴィーンでの主たるレパートリーを、ヴィーン国立歌劇場ウェブサイトのアーカイブから見てみよう [8]。彼女はモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791）の《フィガロの結婚 *Le nozze di Figaro*》（スザンナ、伯爵夫人）、《魔笛 *Die Zauberflöte*》（パミーナ）、《ドン・ジョヴァンニ *Don Giovanni*》（ドンナ・アンナ、ドンナ・エルヴィーラ）といった歌劇場の定番作品に継続的に出演するとともに、同時代の作品ともいうべきヴァーグナー（Richard Wagner 1813-1883）をはじめとするドイツ・オペラの諸作品に、際立って数多く出演している。ヴィーン在籍 10 年間に《さまよえるオランダ人 *Der fliegende Holländer*》（1840-1841）のゼンタは 30 回、《タンホイザー *Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg*》（1843-1845）のエリーザベトは 23 回、同じくヴェーヌスは 11 回、《ローエングリン *Lohengrin*》（1846-1848）のエルザは 59 回、《ラインの黄金 *Das Rheingold*》

[6] 旧姓はベルガー。実業家のエルンスト・クプファー（Ernst Kupfer）と結婚し、二重姓を名乗った（Hartmann 2023）。
[7] 1812 年に設立されたヴィーン楽友協会附属の音楽教育機関として誕生した。「ヴィーン音楽院」として 1909 年までその名が存続した現在のヴィーン国立音楽大学のことである。クップファー＝ベルガーは「ヴィーン音楽院」時代にここに在籍していた。
[8] ヴィーン国立歌劇場サイト “Vorstellungen mit Mila Kupfer-Berger” より

（1853-1854）と《ワルキューレ *Die Walküre*》（1854-1856）のフリッカをあわせて 36 回出演したといった具合である。また、音楽史上ヴァーグナーに通じるドイツ・オペラの道を切り拓いたウェーバー（Carl Maria Friedrich Ernst von Weber 1786-1826）の《魔弾の射手 *Der Freischütz*》（1821 初演）のアガーテを 19 回、マルシュナー（Heinrich August Marschner 1795-1861）の《吸血鬼 *Der Vampyr*》（1828 初演）にさえマルヴィーナとして 5 回出演している。また、彼女はフランス・オペラもレパートリーとしており、ロッシーニ（Gioachino Antonio Rossini 1791-1868）の《ギョーム・テル（ウィリアム・テル）*Guillaume Tell*》（1829 初演）のマティルドを 25 回、マイヤベーア（Giacomo Meyerbeer 1791-1864）の《悪魔のロベール *Robert le Diable*》（1831 初演）のアリスを 23 回演じている。

聖徳大学所蔵の書簡 S で言及されている《メフィストフェレ *Mefistofele*》はどうであろうか。ボイト（Arrigo Boito 1842-1918）によるこのオペラは、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832）の代表作『ファウスト *Faust*』に基づき、ボイト自らが台本をしたためた意欲作で、1868 年 3 月 5 日ミラノのスカラ座で初演された。初演はヴァーグナーの稚拙な亜流だとして非難され大失敗に終わった。その後気を取り直したボイトは 1875 年のボローニャ公演のために改訂を施して成功をおさめ、その後も細かい改訂を重ね、1881 年のミラノ再演の際に現在でも上演される決定版に至った。クップファー＝ベルガーがヴィーン宮廷歌劇場と契約していた 1875 ～ 1885 年は、ちょうど改訂の経過期間に当たる。クップファー＝ベルガーはヴィーンの《メフィストフェレ》公演にエレナ役 3 回（1882 年 3 月～同年 6 月）、マルゲリータ役で 36 回（1882 年 3 月～ 1885 年 10 月）出演し[9]、当たり役としていた。なお、ヴィーンにおけるこれらの公演はすべてドイツ語上演と記録されている。

書簡 S には「《メフィストフェレ》をデビュー作にというお話は残念ながら不可能です。なぜなら、現在ファウスト役を歌える歌手がおりませんので。」とあり、クップファー＝ベルガーがブダペストでの初お目見えに十八番のマルゲリータ役で臨もうとしていた狙いが見て取れる。彼女自身が売り込んだのかもしれない。ファウスト役については後述するが、1868 年の初演時バリトンで設定されていたものの、1875 年の改訂版ではテノールに変更されており[10]、マーラーの書簡にあるファウスト役は当然テノールを想定していたものと考え

---

[9] マルゲリータとエレナ（トロイヤのヘレネ）の二役は、ボイトが「永遠の女性像」を探求しようとした意を汲み、初演、改訂稿初演、世界各地初演の際には一人の歌手が掛け持ちした（Ashbrook 2006: 716）。ヴィーン国立歌劇場のアーカイブによれば、クップファー＝ベルガーも、ヘレナを演じた 3 回のうち 1882 年 5 月 26 日と同年 6 月 12 日の 2 回はマルゲリータと掛け持ちしている。

[10] L' Almanacco di Gherardo Casagliani を用いた検索の結果、ミラノ初演のファウスト役はリリック・バリトンのスパッラッツィ（Gerolamo Spallazzi）からリリック・テノールのカンパニーニ（Italo Campanini）に声種が変更となった。このオペラの著しい改訂のうちでも大きなものと言える。主要キャストの声種の変更は、歌手が持ち役として勉強する時間を考えると大きな影響が考えられるだろう。1889 年 1 月 16 日付の書簡 S で「現在ファウスト役を歌える歌手がおりません」とマーラーが言っているのは、テノールのキャストがいないという意味になる。

られる。

書簡 C では、クップファー＝ベルガーはあくまでも客演であって、劇場との専属契約を前提とした交渉でないことが強調されている。彼女は 1885 年にヴィーンとの契約が切れた後、フリーとなってイタリアに拠点を移しながらも、スペイン、イギリス、ブラジル等の劇場に出演を続けた。1889 年の時点において、書簡 C では「雇用契約」ではないこと、書簡 S では提示した契約書の内容は変更しないと強調している。督促にもかかわらずすぐに契約書が返送されなかったことを考え合わせると、クップファー＝ベルガー側は粘って捻じ込めば専属契約できると踏んでいたと推察することもできる。

3.2　書簡 A（1888 年 10 月初め）および書簡 B（1889 年 1 月 1 日）

以上の状況をより確実かつ詳細に説明できる資料が書簡 A と書簡 B である。書簡 A はマーラーがブダペストに着任した 10 月初めのものであり[11]、以下の通り、まさにクプファー＝ベルガーの契約に関する内容となっている。

【書簡 A：日本語訳[12]】

［前略］

クプファー＝ベルガーさんに関しては、14,000 フローリン[13]以上の金額は出せないとはっきり申し上げなければなりません。- 現在の予算ではこれ以上の金額は出せないのです。また、事と次第によっては他の方を手配しなければならないかもしれませんから、できるだけ早く決断をお願いします。デビューの役はゼンタ、エルザ、ジョコンダが相応しいと思います。その他の役については、K さんと口頭で調整します。［後略］

前掲の通り、クプファー＝ベルガーはヴィーン在籍中、ゼンタとエルザを当たり役としており、マーラーもそれを承知で出演をオファーしているはずである。マーラー側が 10 月に

---

[11] 書簡に日付と地名が書かれていないが、内容から判断して 10 月はじめと推定されている（Willnauer 2022:89）。

[12] 原文は以下の通り。“[…]Bezüglich der Frau Kupfer-Berger muß ich decidirt erklären, daß ich über die Summe von 14,000 fl nicht hinausgeben [kann], und bitte auch keinen Versuch mehr zu machen. – Ich bin, unserem gegenwärtigen Etatsstand nach – einfach nicht im Stande, mehr zu bieten. / Nunmehr bitte ich auch um schnellste Entscheidung, da ich dann eventuell nach anderer Seite hin disponiren müßte. / Als Debut sint mir Senta, Elsa, Gioconda ganz recht. Die anderen Rollen können wir ja dann mündlich mit Frau K. verabreden. […]”（Willnauer 2010: 88-89）

[13] 比較対象として、例えば、ロッシーニの妻で歌手であったコルブラン（Isabella Colbran, 1784-1845）が、人気の絶頂にあった 1822 年にヴィーンの 3 か月主演契約した際の契約額は、宿泊と旅行費用を劇場もちで 1600 フローリンであったという（Deutsch 1934: 236）。1889 年の物価水準から 14000 フローリンが妥当だったかどうか、さらに調査が必要となろう。

ゼンタ、エルザ、ジョコンダ[14] を提案しているのに対し、1 月にはマルゲリータを拒絶する文面にすり替わっているということは、この間の両者のやり取りの中で、役柄に関する駆け引きがあったものと推察される。

さらに、契約交渉の様子が分かるのが、以下の 1 月 1 日の書簡 B である。

【書簡 B：日本語訳[15]】

［前略］

ここのインテンダントは一晩に 400 フローリン以上の出演料を支払う気がないことをお伝えしなければなりません。- 私たちの劇場の不安定な状況は、残念なことに、申し上げるまでもなくよく知られています。- もしクプファーさんが応じる気があるのでしたら、彼女の希望通りに契約を結ぶ用意があります。2 月 10 日から月末まで、5 回の客演で 400 フローリン、場合によっては年をまたがり 9 月 15 日から 12 月 15 日と 3 月 15 日から 5 月 15 日まで月 8 回 5 ヶ月の客演で年 14000 フローリンです。クプファーさんはレパートリーのすべての役柄をイタリア語で歌う義務があります。さらに、彼女がハンガリー語でいくつかの役を学ぶことを厭わないかどうかも、申し合わせておかなければなりません。［後略］。

1888 年 10 月の着任以前から彼女との契約を画策していたものの、年を越えてもまだ契約に漕ぎつけることができていない。そして、さらに約 2 週間後の書簡 S（1 月 13 日）、書簡 C（1 月 16 日）に至り、1 月 25 日まで交渉期間を延長するとマーラーが申し出る結果になるほど契約交渉が難航していたことが明らかである。

またここで初めて、ハンガリー語による歌唱の話が登場する。これについては次章で述べたい。

3.3　4 通の書簡の流れ

---

[14] ジョコンダとはポンキエッリ（Amilcare Ponchielli 1834-1886）が作曲したオペラ《ラ・ジョコンダ *La Gioconda*》（1876 初演）の題名役のことである。ヴィーン国立歌劇場のアーカイブによればヴィーン初演は 1884 年 4 月 29 日であるが、1885 年まで在籍していたクプファー＝ベルガーはジョコンダ役を演じていないため、マーラーが書簡 A でジョコンダを持ち出した理由は定かではない。

[15] 原文は以下の通り。“[…]Vor allem muß ich Ihnen mittheilen, das die hiesige Intendanz keinesfalls für einen Abend mehr als 400 fl zu zahlen geneigt ist. – Ich brauche wol nicht erst auf die precäre Lage unseres Institutes hinzuweisen; sie ist ja leider nur zu bekannt. / – Wenn Frau Kupfer auf dieses Angebot einzugehen geneigt ist, so bin ich bereit derselben einen Contrakt anzubieten, wie sie denselben sich erwünscht. / Also vom 10. – bis Ende Feber ein 5 maliges Gastspiel / a 400 fl / eventuell dann 2 jahrigen Vertrag / 15 Sept. – 15 Dez. / 15 März – 15 May monatlich 8 maliges Auftreten / jährliche Gage für diese 5 Monate 14000 fl / Frau Kupfer ist verpflichtet, sämmtliche Partien ihres Repertoirs italienisch zu singen. / Ferner müßte es vereinbart werden, ob sich Frau Kupfer nicht dazu herbeiließe, etliche Partien in ungarischer Sprache zu erlernen.[…]”（Willnauer 2022: 39-40）

ここまでの4通の書簡を時系列に整理しよう。

（1）書簡C：1888年10月初め

マーラーはブダペスト着任前からクプファー＝ベルガーと出演料を含めた契約交渉に入っていた。デビューの役はゼンタ、エルザ、ジョコンダを推奨。

（2）書簡B：1889年1月1日

契約金および契約期間、出演の頻度について交渉する。また、歌唱言語をイタリア語と指定すると同時に、ハンガリー語での歌唱についても契約内容に含めた。

（3）書簡C：1889年1月13日

契約書の返送を督促する。本契約は客演であり、（専属）雇用契約ではないことを強調。

（4）書簡S：1889年1月16日

前日にも話し合いが行われたが決裂している。契約書の返送を再度督促するとともに、ヴィルトから提示されたと思われる《メフィストフェレ》のマルゲリータ役でのデビューを、ファウスト役の歌手の調整がつかないことを理由に拒絶した。

4　一連の書簡当時のマーラー

4.1　音楽監督・指揮者マーラー

マーラーが着任した1888年10月時点でのハンガリー王立歌劇場は、オーストリア皇帝でハンガリー国王のフランツ・ヨーゼフ1世（Franz Joseph I. 1830-1916）により建設が指示されたのち、1884年9月27日に柿落としが行われたばかりの新しい劇場であった。フランツ・ヨーゼフ1世はヴィーンを第一の首都と考え、ブダペストの歌劇場はヴィーン宮廷歌劇場の規模を超えないという条件で建設を許可している[16]。

前任地ライプツィヒ市立劇場でのマーラーのポジションは「第二楽長（Zweiter Kapellmeister）」であった（Kaplan 2011: 68）。第一楽長にはライバルであり、互いにヴァーグナー作品の上演に尽力したアルトゥール・ニキシュ（Arthur Nikisch 1855-1922）がいた。そこで2シーズンを過ごし、1888年10月ブダペストに移った時、マーラーはついに音楽監督として采配を振る立場に就いた。ライプツィヒでは5月17日付でマーラーの契約解除が受け入れられ（Sponheuer; Steinbeck 2010: XVI）、そこからの4か月半は表面上フリーの状態にあったマーラーだが、書簡の流れから明らかになったように、実質的には既にその間もブダペストのトップに就く者として運営業務に携わっている。

マーラーがハンガリー王立劇場の音楽監督として打ち出した最初のそして重要な方針は、オペラをハンガリー語で上演することであった。インテンダントのベニツキー（Ferenc von Beniczky 1833-1905）とマーラーは真の国民劇場を目指す方針を打ち出すことで一致団結し、そのためには長年不足していたハンガリー語を母語とする歌手の登用が重要であると考えた。「このようなプログラムが成功するかどうかは、高価で、ほとんどが外国人である客演

[16] ハンガリー国立歌劇場ウェブサイト（Magyar Állami Operaház）“The Construction of the Opera House”より

出演者の無限の連続を断ち切るかどうかにかかっていた」(Roman 1989: 357）のである。マーラーの並々ならぬ決意は、歌劇場メンバーに宛てて書かれた着任挨拶の書簡（1888 年 10 月 10 日より前）に表明されている。

> ［前略］ 諸芸術の庇護者、皇帝国王陛下がかくも寵愛に満ち満ちて気前よく推奨を惜しまず、この国を代表する最高位の方々がつねに両手をあげて支援を惜しまず、ハンガリーの芸術的営為の中心であり、同時にまた国家の誇りを成す―当然成すべき、かかる機関の一員たることを、我々の誰もが誇りに思うに相違ありません。［中略］ 個々の義務の遂行と、かつまた全体への完全な帰依―これを我々が旗印に掲げるべきモットーといたしましょう。［後略］（ブラウコップフ 2008: 78-79（書簡 75））

3.2 で挙げたように、書簡 B ではクップファー＝ベルガーに契約後イタリア語で歌うよう伝える一方で、ハンガリー語の歌唱の準備を進めることを要求している。マーラーが目指した国民劇場構想の一端を、彼女との契約交渉の中にも読み取ることができる。

マーラーは最初のシーズンの目玉として、ヴァーグナーの《ニーベルングの指環 *Der Ring des Nibelungen*》のハンガリー語上演を掲げた。彼は《指環》のうち《ラインの黄金》と《ヴァルキューレ》のハンガリー語上演の稽古に没頭していたが、約 80 回のリハーサルを行ったという（Roman 1989:358)。初演はそれぞれ 1889 年 1 月 26 日と 27 日に行われ、5 月 15 日までの間に各 6 回の公演が行われた（Sponheuer; Steinbeck 2010: XXVII)。実は準備段階でマーラーは歌手の調達に腐心していた。前任地ライプツィヒのインテンダント、マックス・シュテーゲマン（Max Staegemann 1842-1905）に宛てた 1888 年 12 月 20 日付の書簡には、ライプツィヒのソプラノ歌手ヨゼフィーネ・フォン・アルトナー（Josephine von Artner 1869-1932）の手紙が添えられており、マーラーはそれを見れば歌手の危機が分かるだろうとシュテーゲマンに訴えているのである[17]（ブラウコップフ 2008: 80（書簡 76))。さらにこの書簡では《指環》の練習にかかりきりのマーラーが、テノール歌手の不足についても嘆いている。翻って書簡 S では、改訂の途中でバリトンからテノールに変更されたファウスト役がいないことを理由に、クップファー＝ベルガーの《メフィストフェレ》出演を断っている。おそらくどの演目においても同様の状態であったのだろう。ハンガリー語で歌える座付き歌手の声種バランスの悪さが、演目を動かす立場のマーラーに悩みの種だったことが窺える。

マーラーとの交友を詳細に表したナターリエ・バウアー＝レヒナー（Naralie Bauer=Lechner 1858-1921）の回想録（Killian 1984）は、ブダペスト時代の記述から始まる。そこで彼女は、当時のハンガリーでの上演習慣について次のように記述している。「一晩の同じ出し物のなかで、ハンガリー語、イタリア語、その上しばしばフランス語やドイツ語が歌われる、

[17] ブラウコップフは編者注で、おそらく彼女がマーラーに雇用を求めたのだろうと推測している。

といった腹立たしい状況を終わらせるために、ただ一つの言語、つまりハンガリー語でしか歌わないことを芸術上の原則として定めた」が、「優秀な歌手たちのうちほんの僅かしかハンガリー語ができなかったし、そのほかの歌手たちは彼にとって問題外であった」。ハンガリーの真の国民劇場を理想に掲げ、運営に乗り出したマーラーであったが、結果的に芸術のこの「マジャール化」は彼個人にとっては拷問に等しかった」ことになる（以上、バウアー＝レヒナー 1988: 28）。

4.2　作曲家マーラー

ブダペスト時代の 2 年半、劇場運営に邁進したマーラーは作曲家として完成作品を残していない。1888 年 10 月の着任直前の夏、彼は後に交響曲第 2 番第 1 楽章となる交響詩《葬礼 *Totenfeier*》を書いている。5 月 17 日、シュテーゲマン宛てに職務免除を願い出て、一週間後には契約解除が新聞で報じられている（ブラウコップフ 2008: 77（書簡 72））。退任が公表されてその地を後にしたマーラーは、故郷のイグラウ、プラハ、ドレスデン、ミュンヘン、ヴィーンを巡った。《葬礼》はこの間に書かれ、8 月 8 日に作曲は完了した（Sponheuer; Steinbeck 2010: XVI-XVII）。

次に集中的に作曲に向かったのは 1890 年の夏で、《子供の魔法の角笛 *Des Knaben Wunderhorn*》のピアノ伴奏版計 2 巻が完成している[18]。マーラーはブダペスト着任前からこれらの歌曲を少しずつ手掛けていた。しかし、バウアー＝レヒナーに向かって「僕は、嫌悪すべき職務以外では、話すことを忘れてしまいそうだ。［中略］作曲することもなければ、ピアノを弾くことすらないんだよ。だって、僕がここでやっているのは、ごくつまらないことで、僕を感動させるようなこととは無関係なんだから」（バウアー＝レヒナー 1988: 27）と語っているように、創作に向ける時間はなかったものと思われる。

1889 年 2 月 18 日、父ベルンハルト（Bernhard Mahler 1827-1889）が亡くなった。翌 1890 年 9 月 27 日には妹レオポルディーネ（Leopoldine Quittner-Mahler 1863-1889）が、さらに 10 月 10 日には母マリー・ヘルマン（Marie Hermann 1837-1889）が亡くなり、兄弟姉妹の多いマーラーはこの時代に家長としても忙しく飛び回ったであろうことが容易に推察できる。
このように、ブダペスト時代の 2 シーズン半は公私ともに多忙であったが、目立った創作の実りはなかった。

5　おわりに

聖徳大学所蔵のマーラーの自筆書簡は「ブダペスト、1889 年 1 月 16 日」の日付があり、前年 10 月にハンガリー王立歌劇場に音楽監督として着任してまもない時期のものである。本稿で公開した文面からは、ソプラノ歌手クップファー＝ベルガーの契約が難航していた状況が読み取れる。契約の仲介に入っていたのはヴィーンをはじめ各地の劇場のエージェントとして活動していたヴィルトであった。本稿ではヴィルトに宛てたこの書簡（書簡 S）

[18] *Lieder und Gesänge* 第 2 集・第 3 集として 1892 年に出版された。

と他の 3 通（書簡 A ～ C)、計 4 通の内容を検討することにより、聖徳大学所蔵の書簡が意味する状況と、それが示唆する当時の劇場とマーラーの業務内容の一端を明らかにすることができた。

クップファー＝ベルガーは 1885 年までヴィーン、次いでヨーロッパ各地で活躍していたソプラノ歌手で、ヨーロッパの劇場のレパートリーとして欠かせなかったヴァーグナーなどの主役を持ち役としており、劇場を統括し、シーズン公演計画を遂行する立場に就いたマーラーにとって必要な人材であったに違いない。着任にあたり当地のインテンダントのベニツキーとともにハンガリー語上演を通じた国民劇場構想を実現するために、スター歌手の招聘を断念してハンガリー語のできる歌手の起用を目指し、場合によっては歌手にハンガリー語で歌えるよう練習を課した。マーラーはクップファー＝ベルガーにもそれを要求している。こうしてマーラーは、ハンガリー王立歌劇場の目指す理念を実現すべく、少なくとも着任当初は粘り強く劇場を統率、指揮していたことが明らかになった。

マーラーのこうした方針に対して抵抗し、反感を露わにする人が増え、最終的に 1891 年 3 月、マーラーはシーズンの途中で 10 年契約を反故にしてハンブルク歌劇場へ移ることになる。

今回は着任前後の数か月という短い期間に着目した。劇場の運営に専念したと言ってもよい 2 シーズン半のマーラーの活動は、さらに一次資料によって掘り下げることができると思われる。このように本研究を通じて新たな課題が示唆されたのは大きな収穫であった。

＊本研究は、聖徳大学川並弘昭記念図書館のご協力により行うことができました。厚く御礼申し上げます。書簡の画像を掲載するにあたっては川並弘純 東京聖徳学園理事長・聖徳大学学長から許可をいただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

Ashbrook, William

2006 「メフィストーフェレ」セイディ; スタンリー (編), 中矢　一義; 土田　英三郎 (監修) 『新グローヴオペラ事典』東京: 白水社: 716-718.

Blaukopf, Herta (ed) ブラウコップフ（ブラウコプフ; ブラウコップ) , ヘルタ（編）

1980 *Gustav Mahler / Richard Strauss Briefwechsel, 1888-1911.* München: Piper.

1982 『マーラーとシュトラウス ある世紀末の対話 往復書簡集 1888~1911』塚越　敏（訳）東京: 音楽之友社 .

1983 *Gustav Mahler, unbekannte Briefe.* Wien: Paul Zsolnay Verlag.

1988 日本語訳『グスタフ・マーラー　隠されていた手紙』中河　原理（訳）東京: 音楽之友社 .

1996 (enlarged and revised edition) *Gustav Mahler Briefe.* Wien; Paul Zsolnay Verlag (1a 1924).

2008 日本語訳『マーラー書簡集』須永　恒雄（訳）東京: 法政大学出版局 .

Deutsch, Otto Erich; A. H. F. S.

1934 “Austrian Currency Values and Their Purchasing Power (1725-1934)” *Music & Letters.* 15(3): 236-238.

Kaplan, Gilbert

2011 *Das Mahler Album.* New York: Kaplan Foundation.

Killian, Herbert（ed.）　バウアー＝レヒナー, ナターリエ（著）; キリアーン, ヘルベルト（編）

1984 *Gustav Mahler: In den Erinnerungen von Natalie Bauer Lechner. Hamburg*: Karl Dieter Wagner.

1988 日本語訳『グスタフ・マーラーの思い出』高野　茂（訳）東京: 音楽之友社 .

Mahler, Alma　マーラー（＝ヴェルフェル），アルマ

1991 *Gustav Mahler: Erinnerungen.* Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag (*1a Gustav Mahler: Erinnerungen und Briefe.* 1940, Amsterdam: Allert de Lange).

2011 日本語訳『マーラーの思い出《新装版》』酒田　健一（訳）東京: 白水社（1949 年の原著第 2 版，1969 年のミッチェルによる英訳版，1971 年のミッチェルによるドイツ語新版に基づく）.

Martner, Knud

1985 *Gustav Mahler im Konzertsaal: eine Dokumentation seiner Konzerttätigkeit, 1870-1911.* Kopenhagen; Hamburg: KM-Privatdruck Musikalienhandlung Karl Dieter Wagner.

中川　右介

2012 『指揮者マーラー』東京: 河出書房新社 .

Reeser, Eduard (ed)

1980 *Gustav Mahler und Holland: Briefe.* Wien: Universal Edition.

Roman, Zoltán

1989 “Mahler and the Budapest Opera.” *Studia Musicologica Academiae Scientiarum Hungaricae* (Akadémiai Kiadó): 31/1: 353-369.

Sponheuer, Bernd; Steinbeck, Wolfram (ed.)

2010 *Maher Handbuch.* Stuttgart: Metzler.

Willnauer, Franz (ed)

2006 “*Mein lieber Trotzkopf, meine süsse Mohnblume*”*: Briefe an Anna von Mildenburg / Gustav Mahler.* Wien: Paul Zsolnay.

2010 *Gustav Mahler »Verehrter Herr College!« Briefe an Komponisten, Dirigenten, Intendanten.* Wien: Paul Zsolnay.

2012 *Gustav Mahler, Briefe an seine Verleger.* Wien: Universal Edition.

2022 “Neue unbekannte Briefe und ein Musikmanuskript Gustav Mahlers.” *Nachrichten zur Mahler-Forschung* (Internationale Gustav Mahler Gesellschaft) 75: 37-55.

参考ウェブサイト

Antonicek

1968　“Kupfer-Berger, Ludmilla (Mila)” *Österreichisches Biographisches Lexikon.*
https://www.biographien.ac.at/oebl/oebl_K/Kupfer-Berger_Ludmilla_1853_1905.xml
（2023 年 10 月 25 日閲覧）

Gherardo Casaglia

L'Almanacco di Gherardo Casaglia
https://almanac-gherardo-casaglia.com/index.php　（2023 年 10 月 25 日閲覧）

Harten, Uwe

2023　“Kupfer-Berger, Ludmilla (Mila)” *Oesterreichisches Musiklexikon Online.*
https://www.musiklexikon.ac.at/ml/musik_K/Kupfer-Berger_Ludmilla.xml
（2023 年 10 月 25 日閲覧）

Magyar Állami Operaház（ハンガリー国立歌劇場ウェブサイト）

https://www.opera.hu/en/about-us/building/opera/　（2023 年 10 月 25 日閲覧）

Mahler Foundation

Ignaz Wild (1849-1909)

https://mahlerfoundation.org/mahler/contemporaries/ignaz-wild/　（2023年10月25日閲覧）

Wiener Staatsoper（ヴィーン国立歌劇場ウェブサイト）

Vorstellungen mit Mila Kupfer-Berger

https://archiv.wiener-staatsoper.at/search/person/7195　（2023 年 10 月 25 日閲覧）

やまもと　まりこ（音楽学）